

我如来を信ずるが

故に如来在ます也

曾我量深講話

曾我先生が満九十歳を迎えられたことを慶賀して、曾我量深先生頌寿記念会が去る昭和四十年十月に催され、その折に發起人を代表して、金子大栄先生が挨拶にひきつづいて「諸仏と善知識」と題してご講演をされ、曾我先生がそれを受けて、「如来あつての信か、信あつての如来か」という題でご講演をされたのであるが、本書はこの両先生の講演の筆録よりなるものである。

この題目について曾我先生は「如来在ますがゆえに、われわれはそれを信じなければならぬのか。また、信ずることができぬのか。またわれわれ衆生の願ひ、もしくは、われわれ衆生の信心あるが故に、如来はあらわれてくださるのであるか。どちらの方がもとであるか。すなわちどちらの方が先であるか。」というような意味を掲げるものであると言われ、このような題を掲

げたのは、ひとえに清沢満之先生のご教示によるものであると言われている。これについて先生は更に「如来さまがあつて、それで如来さまを信ずるのか。自分が信ずるから如来さまがあるのか。……これはどうも別に決めようたつて決められない。これは、一方に決めるわけにはいかないと思います。だからほんとうの問題になる。こういう問題を掲げて教えてくださった清沢満之という善知識に遇うた。そういうことは非常に尊い縁であり、因縁である」と言われている。如来と信とはどちらが先であるという風に決めるわけにはいかない問題である。にもかかわらず先生が「我如来を信ずるが故に如来在ます也」と力強く叫ぶことができるのは、どこに根拠があつてのことであろうか。先生は、これを親鸞聖人の『教行信証』における信巻開頭の意義に聞くことによつて、確固として表白されるのである。伝承の凝集である行巻は、正信偈で結ばれ、その終りには唯可信斯高僧説と勸励されて、全く首尾完結し、歴史的伝承は言いつくされて何ものをも加える必要がない。そこから信巻を開頭しなければならぬ意義は何か。そこに、行巻からいわば「は

み出した」所に、親鸞聖人の探求精神の熾烈さと真剣さを見るのである。行巻の伝承に対して信巻以下を己証と言われるのであるが、そこにおいて、教えに潜む仮なるものを批判し、或はその教えの中からはみ出した自己をもつて、教えに問いただす態度を学ばねばならない。それで『教行信証』の前編というものは、如来の本願、南无阿弥陀仏しますがゆえに、それゆえに、われわれはそれをばおとなしく信ずる、信ずべきものである。」のではあるが、それに無理におさめる必要はない、「おさむべからざるものはおさめてはならぬ」のである。

おさまらない所からこそ本当の問題が始まる。それ故に衆生の信が先であるのか、如来の本願が先であるのかということを、清沢先生が問題とされ、曾我先生がこの問題によつて一生歩ましめられたと言われるのであろう。決めることのできない問題を自己の問題として歩むことの尊さを、常に全身をもつて語られる曾我先生の、面目躍如たるご講話であると思われる。

△A五版 一一七頁 一、〇〇〇円  
中道社刊V(本多)